

“よさこい”でまちに あらたなコミュニティ

鮮やかな衣装に身を包み、鳴子を片手に楽しそうな笑顔で声を上げて踊る「よさこい踊り」。
今、全国で盛り上がりを見せるこの踊りは、市内にもチームが多く存在し、様々なイベントでその躍りを披露してくれまふ。
今月は、そんな「よさこい」のルーツ、「あつたか滝野冬のまつり」に参加する市内各チームの思い、そして「よさこい」にかける情熱をクローズアップ。

あおのざくら 青野桜



川添 誠代表

二十歳から三十代の青野原駐屯地の自衛隊員でつくるチームで、全員が男性であることが特徴で、それが魅力でもあります。
活動を通して、地域の方々と交流を持てるのが喜びであり、加東市のチームの一つとして地域貢献がきたり、自衛隊を身近に感じていただければうれしく思います。
冬のまつりでは、「風の音」という曲を踊ります。徒手格闘の演舞で自分たちで振り付けを考えながら楽しく取り組んだ舞を寒さに負けず力強く踊りたいと思います。日頃培ったチームワーク（団結力）をお見せします。

SC21東条 コスモス



宮下 隆人代表

地域のコミュニティづくりと運動不足解消のためにみんなで楽しく踊る、気軽に参加できるチームです。
今回の冬のまつりがチームとして初めてのステージですが、岡山市のうらじゃ祭りや踊られる「結」UIという曲をお借りして、楽しみながら踊りたいと思います。
全参加者が一緒に踊る「総踊り」に一番の魅力を感じています。他チームのメンバーや観客と一緒に踊った後の一体感が、人の和を感じさせてくれるからです。
自分自身が育った場所で活動すること、この地域が少しでも楽しい場所になればうれしいです。

たきっこ 滝平ノラ



大橋 洋子代表

三歳から六十代まで六十五人のメンバーで活動し、小さな子どもから大人までが、心を揃えて踊ることがチームの魅力です。
冬のまつりでは、かわいい子ども達の滝呼ぶち、滝呼キッズとともに毎年お世話になるスタッツや、協力してくれるチームへの感謝を込めて、一杯踊りたいと思っています。
私たちは、大好きなこのまちで活動できることを心から誇りに思っていますし、市内のたくさんの方のイベントで踊れることをとても楽しみにしています。よさこいを通じて、地域や年代を超えた仲間づくりを楽しみながら、これからも人の輪を広げていきたいと思っています。



あつたか滝野冬のまつり よさこい踊り大会 出場チーム紹介

(加東市の六チームのみ:五十音順)

ほおずき チーム鬼灯



勝呂 良太代表

兵庫教育大学の学生でつくるチーム鬼灯は、個性豊かなメンバーが踊りを通じて一つにまとまり、元氣と笑顔で観客を魅了するチームです。
冬のまつりでは、「灯」という鬼灯のオリジナル曲を踊ります。みなさんの心に笑顔の炎が灯るように、精一杯踊りたいと思います。そして、寒さに負けない激しい踊りと笑顔で観客の心をあつたかくしたいです。
よさこいが縁で、地域の方々のかかわりが増えました。これからも加東市のチームとして、様々なイベントで活動し、普段の生活では得ることのできない人と人とのつながりを大切にしていきたいと思っています。みなさんの笑顔に会えるのを楽しみにしています。

ふうからいてい 風火雷霆



竹内 誠代表

自分たちが楽しむことが、観客のみなさんに楽しさを伝える最良の方法であると信じ、一曲一曲を大切に踊ることを心がけているチームです。
冬のまつりでは、北海道のYOSA K O I ソーランで踊られた曲をお借りして、チームで構成、振り付けをした曲を踊ります。踊り子、旗振り、燗り手のすべてが奏でる音楽をじっくり見ていただきたいと思ひます。観客に感動していただけることを願ひ、一瞬一瞬を大切に踊ります。
よさこいの魅力は、自分を自由に表現でき、踊りを通じて一つになれ、たくさんのお出合いがあることです。加東市でたくさんの方のメンバーが増えればと願っています。

むーぶ 夢舞やしる



西田 和美代表

四十歳以上のメンバー十四人で活動する、仲の良さが魅力のチームです。
冬のまつりには、毎年新しい曲で参加していますが、今年「よさこいソーランロック」という曲を踊ります。初披露曲なので、緊張感と意気込みはひとしおです。
チームが発足して四年になります。が、四年前より激しい曲を踊れるようになりまし。初めはもつと若い時によさこいとお出合いがたと思ひつていましたが、今はこの年齢になつても踊ることが幸せです。
これからも、純粹によさこいを楽しみながら、人との出合いに喜びを感じて頑張りたいと思います。



よさこいのルーツ

よさこい祭りはもともと高知県で行われていた盆踊りで、昭和二十九(一九五四)年、戦後の不況を吹き飛ばそうと高知商工会議所が考え出したのが始まりと言われています。
高知で始まった「よさこい踊り」は、当時高知県在住の作曲家が作詞・作曲を、日本舞踊の師範が振り付けを担当されたそう、そのスタイルは夏祭りなどでよく目にする盆踊りに近いもので、鳴子を手に持ち、商店街をパレードするというのが当初のスタイルだったそうです。

よさこい踊りの今昔

今ではその昔ながらのスタイルを「正調よさこい鳴子踊り」と呼びます。
今、みなさんがよく目にされるよさこいは、
・美しく艶やかな衣装
・派手なメイク
・激しいリズムの音楽
・ステージで踊る
などの印象が強いのではないのでしょうか。
しかし、現在のよう様々な「よさこい踊り」のスタイルができたのは、その「正調よさこい鳴子踊り」の曲を自由にアレンジしてよいという作曲家の言葉があったため、本場・高知の「よさこい踊り」では、鳴子を持って踊ること

鳴子って?

「よさこい踊り」とくれば、手に持つのは「鳴子」ですが、もともとはどのように使われていたのか、ご存知でしょうか。
「鳴子」は、本来、農作物を荒らすスズメなどを追い払うための農機具で、戦後から積極的に現代音楽の楽器として取り入れられるようになりました。今ではチームによつて様々な形や色の鳴子があり、それも見所のひとつとなっています。

また、全国各地の「よさこい祭り」では、鳴子だけではなく、扇子やちようちゃんを持って踊るチームもあり、これもまたチーム独自のアレンジが加えられているようです。